

福川伸次氏（元大平通産相秘書官）に聞く

通商産業大臣時代

―聞き手・阿部 穆



ヨーロッパ9カ国への友好親善の旅で。ハンガリーの
フォックス首相、ペーター外相と会談する大平通産相
と一人おいて福川伸次秘書官（右から5人目）（ブダペ
スト・1969年10月22日）

大平大臣の民間主導論に事務方が反発

就 実 華 去

—— 福川さんは、昭和四三年（一九六八年）一月に大平さんが佐藤（栄作）内閣の通産大臣に就任された時に秘書官に就任されてから、四五年一月に宮澤（喜一）さんに交替するまでの一年二カ月と、その後、大平総理が五三年一月に就任してから亡くなる五五年六月二日までの一年半の間、二度にわたって秘書官をお務めになつて大いに補佐されたと思います。まず最初に四三年に秘書官に就任されるまでに、何か接点といいますが、大平正芳という人との出会いはあったのですか。

福川 私は就任前にお会ひしたことは、ありませんでした。したがってまったく省内の人事で熊谷（典文）次官から「（秘書官を）やれ」という話になつて、あの時、大平大臣を前から存じ上げていた増田実秘書課長に連れられて、築地の栄家へご挨拶に参上したのがはじめての出会いでした。

—— 大平さんは通産大臣に就任された直後に、「これからの経済運営は、民間主導でやつてもらいたい。民間も、はっきりした自覚を持つべきだ」というような、いわゆる市場経済主義という認識を打ち出されて、これまでの官主導というか通産省のポリシーとはやや違うような印象を与えて、通産省の皆さんも戸惑われたということがあったのですが、これはどういうところから出てきたんですか。

福川 私の若干の憶測もありますが、一九六〇年（昭和三五年）池田（勇人）内閣の時に、政府は貿易為替自由化計画大綱というものをつくつて、当時、貿易では自由化率四〇パーセントだったのを三年間で九〇パーセント以上に上げる（実施率九六パーセントまで行つたと思ひますが）ということ

になっていたわけです。そして次に出てきた課題が資本自由化問題で、それが当時、話題になっていましたし、資本自由化をどうして行くかが一つ大きな課題であったわけです。当時、資本自由化というのは「黒船の再来」といわれていて、それから日本の産業をいかに守るかということに産業行政は力を入れていた、という状況でした。しかし、そういうことはなかなか通用しない、資本自由化をもっと進めるべきだ、というのが多分、大平大臣の考え方だったと私は思います。

その前に、通産省では、例の特振法（特定産業振興臨時措置法）問題という大騒ぎがありました、競争力をどう強化するかという議論がいろいろ行われていたわけですけれども、産業をできるだけ自立していく、海外に対しては自由化をしていく、という必要も高かったと思うんです。大平大臣もよくいろんなところに書いておられますが、ここにも一つの例がありますけれども、「受身意識からの脱却」という意識が非常に強かったように思います。私は、結果として、それが正しかったと思うんですが、もちろん通産省自身としては、日本の産業はまだ弱い、もっと守らないといけないという認識でした。したがって、民間主導論に対しては、事務方には反撥が強かったというように思います。

——通産省の事務方はやはり反撥した……。

福川　しかし客観的に見ると、大平大臣の判断は正しかったと思っています。その当時、実は、一番問題になっていたのが、自動車とかコンピュータの自由化をどうするのか、その資本自由化をどうするのかということでした。その中でも、例えば中心のエンジンの自由化をどうするかと、いろいろ議論をしていたわけですが、これは最終的にはもうちょっと後までかかるわけですが、資本自由化はさらに深刻でした。資本自由化問題というのは昭和四〇年から始まって、ちょうど大平大

実 臣が通産大臣になった頃（四三年）に、一番、コアになる問題として登場していたのです。したがって、これをいかにスムーズに持つて行くかということに、非常に腐心されていて、受身意識からの脱却とか民間主導とかを言われたんだと思うんです。

去 私は後になって振り返ってみると、やや手前味噌的になりますが、産業行政が早く権限を放棄して、産業を海外にさらしたから、日本の産業の競争力は強くなったのだ、という評価をよくされるわけです。それが金融の護送船団方式とよく対比されるわけですが、結果論としては、産業行政が良かったと評価をされる一番の源というのは、私は大平大臣の民間主導論だったと評価しています。

— その拠ってきたところは、大平さん自身が東京商大の出身であり、若い時から市場経済主義の志向があったからじゃないですか。大蔵官僚出身だから、官主導というか計画経済というニュアンスのある人がともすれば多いんですけれども、大平さんの場合は、福川さんが書いておられるように、「倫理感に裏付けされた市場経済主義」というようなものですが、これはどうですか。

福川 基本の哲学、基本の認識として、例えば「行政のできることにには限界がある」とか「経済や産業を特定の省庁とか特定の人物が右や左と言えるものではない」とか「皆んなの知恵がうまく活用されるのが一番いいんだ。それにはやっぱり市場主義が一番いいんだ」といったような、非常に謙虚な思想をお持ちだったと思います。それが倫理観に裏付けられた市場主義ということですから……。やはり絶えず物事の考え方として、謙虚に行動していかなければいけないという、それも前向きなところと一脈通じているという気がします。

— それでは各論に入つて行くわけですが、通産大臣在任中にあった大きな出来事で、一つ

は新日鉄の発足、富士・八幡の合併ですね。もう一つは日米繊維交渉だと思っております……。まず前者の富士・八幡の合併は、大平通産大臣が就任される前に両社から発表されておつて、実際に合併するのは昭和四五年でしたが、その間、このような巨大な製鉄会社の誕生というのは好ましくない、という経済界ならびに公正取引委員会の見解があつたけれども、むしろ大平さんはこれに対しては合併促進の立場だつたですね。それで密かに公正取引委員会の（山田精一）委員長と会つたりして働きかけたようですが、この問題に対する取り組み方は、どうだつたのですか。

富士・八幡の合併促進の立場から

福川　いつも非常に慎重ではあつて、かつ積極的でした。慎重というのは、執り進め方が外に洩れないようにしながら関係者の理解を求めていくということでしたし、気持ちとしては積極的に実現したいという立場であつたと思います。これは、八幡・富士両社のシェアが、だんだん下がつてきていたし、そういう日本の産業が強い基盤を持たなければいかん、実力を持たなければいけない。それは企業が提携・合併を本当に望むならば、それに国の経済に弊害がないのなら、やらしてやったらいいではないか、というお考えだつたと思いますね。それで、あの頃は裏では興銀（日本興業銀行）がその意見を強く主張していて、中山素平さんが実は推進派でした。大平大臣と一橋大当時の同級生の鷹尾（寛）氏が当時、役員をしてらっしゃつて、栄家に集まつては、どういふふうにしたらいいかを相談してしました。興銀サイドの持つてゐる情報と通産省の下から上げてくる情報とを突き合わせた

実
ので、情勢を的確に捉えて判断することができました。それで、当時の公取委員長が、日銀から行っ
就
た白髪の子田精一さんでした。公取委員長としても所管行政の大臣の意見は充分に聞く意向であると
華
いうことが興銀サイドから入ってきて、密かに二人が会うことになりました。その場所は興銀の八重
去
洲口にある東京支店の会議室で、そこで大平・山田会談が開かれたわけです。

——妙なところで会談をやったものですね。

福川 その時、新聞記者に見つかからないように策を弄しました。通産大臣室を出て、官用車で第一
議員会館へ行き、大平議員の部屋へ入る。トイレに行くような顔をして部屋を出て、議員会館を裏か
ら出て、キャピトル東急側に待たせたハイヤーに乗って八重洲口へ到着したというわけです。まあ筆
抜けですね。その会談では、自分の意見を率直に話しておられましたね。例の調子ではあるが、非常
に説得力があったので、山田さんも「ある程度、これは考えなければ」と考えられたのでしょう、
これは推測の域を出ませんが 大平・山田会談があつて、公取のかたくなだった反対論に少し
変化が出てきた。それから、どういう条件にすればいいか、というような点に議論が少しずつ進み出
しました。大平大臣は、「俺がやったのだ」などということを言われませんが、公取にそついう変化
があつたように、私は思います。

当時、田中（角栄）さんが幹事長でした。最後は政治問題になるかも知れないと考えられたのでし
よう。結局は、そんなに大きな政治問題にはならない形で結論が出ましたけれども、田中さんとはし
よつちゆう連絡を取り合つて、状況報告をして、こうする、ああするといふ話をされておられたです
ね。ですから、たしか『私の履歴書』にも合併について「密かな満足感を感じている」といふような

ことを書いておられましたけれども、それは実感だったと思います。

——その合併はうまく行ったのですが、もう一つの繊維交渉のほうは、不調に終わったわけですね。これは、もともとその前の大統領選挙でニクソン大統領が南部諸州の票を集めるために、繊維の輸入制限をするという公約をブツて、その後にたまたまのタイミングですが、沖縄返還交渉というものが出てきて、どうも巷間、伝わるころでは、佐藤総理が「糸を売って縄を買った」というような、いわゆる沖縄返還実現のために、ある程度、繊維業界には我慢してもらわなければいかん、というようなニュアンスがあつたわけです。一方、大平さんはそうじゃなくて、そういう事情を知っているか知らないかは別として、筋論としてアメリカが無茶苦茶な繊維製品の輸出制限みたいなことを課してくるのはガツトの精神に違反するんじゃないか、という立場だったと思うんですが、それはどうだったのですか。

筋を通した日米繊維交渉

福川 おっしゃる通りです。貿易問題に関しては、五月でしたかスタンス商務長官が日本にやってきて、いろんな会談をやりました。お宅（瀬田）にスタンス長官らを招かれた時の話ですが、冷却用の氷柱が倒れたりとか、いろいろなハプニングが起こりますけれども、一生懸命に話を聞いておられました。やっぱり思想は、「これから日本も自由化して国際社会の一員になるとすれば、掘って立つべきルールというものを尊重しなければいかんだ」と。それには「アメリカのわがままも許しては

実
ならない」という気持ちがあつたと思ひますね。沖縄返還と佐藤総理が絡んだような形に世の中で受
就
け止められているんですが、大平大臣の考え方は、沖縄返還というのは別に繊維というお土産がなく
華
ても実現できる、という認識なんですね。これは、日本の地位も高まつてきたし、日米関係もかなり
去
成熟してきた、財政負担が大きいという理由も加わつて、アメリカの事情から、日本に返還してもよ
いというような情勢になつてきていると考へておられたようです。したがつて、繊維の問題について
は、やっぱりきちんとしたルールで解決したほうが良いというのが、基調の考へ方でしたな。

しかし、佐藤総理からは、「とにかく沖縄返還交渉がまとまるまで決裂するなよ。できるだけまと
めるよ」と、言われていましたから、何とかまとめるために、いろいろな案を出して時間を稼ぐとい
ことになつて行きました。「アメリカも横暴だなあー、わがままだなあー」と、よく言つておられま
したが、結局、時間稼ぎという形で在任中は終わるといふことになつたのです。途中で自主規制宣言
をしてみようと思ひました。しかし、それにアメリカが反対しました。何としても政府間協定にしない
といけない、という国内事情があつたのでしよう。佐藤総理とニクソン大統領の間で、どういふ約束
があつたかは知るよしもありませんが、そういう経緯になつていたんですね。大平大臣としてみると、
事の端しばしに佐藤・ニクソン会談に何か裏があつたのではないかという気持ちは、どうも隠せなか
つたようですな。

——佐藤さんのほうから言わせると、沖縄返還交渉を円滑に進めるために、できれば繊維交渉のほ
うは決裂ではなくて、穏やかに多少、日本のほうが退いてもまとめてほしい、という意向があつたん
じゃないですか。

福川 それは、佐藤総理としては、そうだったと思います。しかし、日本の繊維業界のほうでは、東洋紡の谷口（豊三郎）さんや旭化成の宮崎（輝）さん いずれも大平大臣と親しい方がたです。が、しょっちゅうこられて、「これは非常に理不尽だ」と言っておられました。事実、その「被害なきところに規制なし」というのが、当時の業界の主張でした。たしかに被害の立証がアメリカ側ではできないわけです。そのため、高橋淑郎繊維雑貨局長を団長に、アメリカへ調査団を送るわけです。これも「被害なし」という報告ですから、そうなる、なかなか妥協の余地がない、ということではあったですね。ですから、政府間協定はできないと。しかし、辛うじてできるとすれば、日本が対米関係を考慮して自主的に規制をするという「自主規制」が限度だ、ということにならざるを得なかったですね。

——四四年の秋に佐藤訪米ということがありまして、沖縄返還交渉は山場にかかるわけです。同時に、日米間のジュネーブ協議というのがある、ガットのルールでやるかやらないかで、さんざん揉めるわけです。それで、その拳句に、交渉は不調に終わるわけですけれども、佐藤訪米、あるいは沖縄交渉、ジュネーブ交渉というのは、ほぼ同時進行的だったんですね。

福川 その通りでした。それで、私はその時期のことは必ずしも正確ではないかもしれませんが、佐藤総理がジュネーブ交渉の受け入れを言われたわけですから、ほとんど同時並行的に進んでいたのです。それで、沖縄交渉はケリがついて、ジュネーブのほうは、もう少し経っても事務的には話がかからない、という事態になってしまっただけですね。

——それで結局、その次の佐藤内閣の改造の時に、通産大臣を更迭するということになるわけです。

ね。大平さんが更迭されるわけですが、その頃は福川さんは秘書官として側で見えておられて、まさか大平通産大臣が交替するとは思っていなかった……。

意外だった大平通産大臣の更迭

福川 私は交替することはない、と思っていました。大平大臣自身も、そう思っていたと思います。それは、改造は四五年一月一四日の夕方でしたが、一三日の深夜に、幹事長の角（栄）さんから、「大平君、留任だよ」という電話があるわけですね。だから本人も多分、そうなるだろうと思っていたでしょう。しかし、大平大臣は、不審というか「何かあるな」とは感じていたんでしょう。したがって、四時から組閣が始まった時に、赤坂の山王グランドビルの大平事務所にも身柄を移すんですね。「そっちで待ってるよ」と、いうことだった。もちろん私も山王グランドビルの事務所と一緒に行きましたが、秘書官室のメンバーには、「また帰ってくることになるかな」と冗談まじりに言っただけでした。そして、あの組閣は事前の話はほとんどなくて、呼び込みも後になって、組閣名簿が先に発表される、というスタイルになっていました。当時、保利（茂）さんが官房長官で、その発表をずっとテレビで見っていたら、通産大臣・宮澤喜一ということだったのです。さすがに大平大臣も、ちょっと顔がくもったけれども、「いや、いろいろ世話になったな」という一言でした。私も本当にびっくりしたというのが、偽らざるところですね。

——通産省内も大体、同じような気分でしたか。

福川 そういふ感じでした。

——何か秘書官も用意していなかったとか……。

福川 そうなんですよ。用意してなくて、結局、山田勝久君にするわけですから、まったく用意もないものですから、彼はどっかの会へ行っていて酒も飲んでいて……（笑い）。それを急拠、呼び出して、一生懸命に水を飲ませて、酒を冷ましてから行かせた、ということになりましたね。そして翌日でしたが、書類を渡すだけの簡単な事務引継ぎをやって、新旧大臣が職員に挨拶をした後で、旧防衛庁の古い庁舎のエレベーターの中で、一緒になった宮澤新大臣が「日米繊維交渉はどういうふうにしたら良いか、一度、お教えを乞いに伺いますが……。」と大平大臣に言ったら、「まあ、よく考えてくれよ」という反応でした。

——じゃ、あまりアドバイスすることはないと……。

福川 と、いうことでしよう。それで最初は宮澤さんも懸命に取り組まれましたが、だんだんと進むうちに、これはむずかしいということになって、愛知揆一外務大臣とお二人で「これは話が進められない」ということになって、宮澤大臣も「規制なし」という方向に傾いていけるわけです。そして、田中角栄さんが通産大臣になって、「大政治英断」というわけで、当時、二、〇〇〇億円だったと思いますが、補助金を繊維業界に撒いて米国側の要求を呑むということになりました。しかし、規制には入りましたが、輸出がそんなになくなつて、枠を余すことになりました。何のために大交渉をやつたのか分からないような結果になつたわけです。

——しかし、アメリカのほうは面子が立つたわけですね。佐藤さんも、それで良かったんじゃない

ですかな。

福川 そういうことも知れませんが。

——その前に、(茅ヶ崎の)スリー・ハンドレッドクラブのゴルフ場で、たまたま大平さんと宮澤さんが一緒に廻っている時に、佐藤さんが食堂で一緒になって、何か……。

福川 それは一四日の(内閣)改造のちよっと前ですね。私は側にはいませんでした。が、佐藤さんが余りにもつれなかったということは伺ったことがあります。

——そうですね。佐藤さんが、「そこにいるのは誰だ」と言い、大平さんが「新聞記者ですよ」と答えたら、「新聞記者には親切にしてあげないといけないよ。ニュースがあるんだから」とか何とか微妙なことを言って席を立った、という。

福川 そのようですね。その時は、私は現場にはいませんでした。

(平成二二年一月一八日電通総研会議室で取材)

福川伸次(ふくかわ・しんじ) 一九三二年、東京都生まれ。五五年

東大法学部卒と同時に通商産業省に入省。六八年大平正芳通産大臣秘書官、

七八年大平内閣総理大臣秘書官、八四年産業政局局長、八六年事務次官を

へて、八八年退官。八九年野村総合研究所顧問、九〇年神戸製鋼所副社長、

九四年電通総研社長兼研究所長、九九年電通顧問兼電通総研研究所長、現

在に至る。著書に『21世紀・日本の選択』『産業政策』など。